

### 3 【うきもの】

「そんでき」

ぼくはつづけました。

「【あやかし】をみたあとだけんど、おおかわのながれのほうさながめとつたら、なんかういとる。くじらのせなかかなあ、それともちいさいうきしまなんかなあ」

ぼくは、そいつをおもいうかべて、寒気（さむけ）がしました。

いにしえの怪獣（かいじゅう）かもしれないし、海からまよいこんだ白鯨（はくげい）かもしれない。

いずれにしても、あの背中のゆれは、まるで巨大な蒟蒻（こんにやく）だったものです。

とても生々しい。

「でも、また沈む。しばらくして、またうくんでしょう」

「かいじい、よくしつとるな」

ぼくはあきれました。

あきれながら、何かを疑っていました。

その何かは、いまならはっきりいえます。

懐爺も、おばけの仲間だと疑っていたのです。

もちろん、疑いのなかの半分は羨望（せんぼう）でした。

みあげると、懐爺はうれしそうに、乱杭歯をふるわせています。

「それは浮島ではなく、【うきもの】というおばけですよ。そうそう、ちょうどいまごろの、花曇りの季節にあらわれる。わたしも何度かみたことがあります。よく蜃気楼（しんきろう）のおばけ、【かいやぐら】とまちがえられますが、【かいやぐら】は幻想的（げんそうてき）で、【うきもの】は現実的（げんじつてき）といいましょうか」

「なんじゃ、またおばけかのう」

ぼくはあきれました。

いくらこっちがこどもだからといって、どいつもこいつもふざけてやる、と憤慨（ふんがい）もしていました。

憤慨しながら、なぜか、ともだちに茶化（ちゃか）されている、気分もしました。

その気分には、かまってもらえたうれしさも、まじっていました。

「金ちゃん、めずらしく怒っていますね。おぼけはなにも、金ちゃんをコケにしているわけではない。おぼけだって好き嫌いがありますからね。金ちゃんはおぼけに、すかれているだけなんですよ」

「そんなら、しかたないんか」

「せつなくても、しかたがないんですよ」

懐爺はいつもどおり、ぼくの肩に、汚い手をやさしくおいたのです。